



●久しぶりの色彩教材研究会幹事会

去る8月26日、数年ぶりに対面での幹事会が北千住のお店で対面で開催され、幹事会13名のうち9名が参集した。入会いらい初めて会うメンバーも多々あった。

吉澤主査の進行により10月のおしゃべり会や秋の研究会大会の詳細がてきぱきと決定され、北畠顧問の提案により、ビールを片手に各自が自己紹介プラス、これまでの自分の歩みを振り返って語る時間が設けられた。

色彩に携わったきっかけも立場も三者三様ながら、それぞれが時間とエネルギーを工面し関心を追究し、今ここにいる事実、大変感銘を受けた。

ただ、北畠顧問と永田顧問からの引退希望は、青天の霹靂であった。両先生の豊富な経験・知識と中間世代の不在ゆえ、名誉職での在留をどうにか内諾いただいたが、色材研の変化の兆しを感じる一幕であった。内容は時代に即して変化しつつ「色で遊び、遊びを通して学ぶ」の色材研のモットーは大切に、仲間と進んでいこうと思う残暑の夜であった。

(副主査 山根千明)

永田から一言。両足の麻痺が進行し、会合に出席できなくなりました。自宅のできる「色彩教材研究会通信」の配信は続けさせていただきます。(永田泰弘)

●万葉集のなかの色名 -1

奈良時代に編纂された万葉集の短歌の中に日本の色の名前が、どのような形で使われているのかを少し覗いてみたいと思い、万葉集を読んでみることにした。

万葉集は西暦645年から120年程かけて編纂されており、万葉仮名の時代であった。

あかねさす 紫野行き 標野行き
野守は見ずや 君が袖振る

額田王 (巻1-20)

あかねの根から茜色の染料が取れ、紫は紫の染料をとる。二つの色の表現が見られる。標野(しめの)は紫草の栽培園であろう。

紫草の にはほへる妹を 憎しあらば
人妻ゆえに われ恋いめやも

大海人の皇子 (巻1-21)

紫草で染めたように美しい貴女が憎かったら、人妻の貴女にどうして恋い慕うことがあるのかという相聞歌。

春過ぎて 夏来たるらし 白栲の
衣乾したり 天の香具山

持統天皇 (巻1-28)

白栲しろたえ(は、白いこうぞの織物。白妙とも書き、広く白色の表現になった言葉である。

茜色、紫色、白色の色名がみられた。

* 講談社文庫・中西進・万葉集から (永田泰弘)

●大辞泉ひろいよみ 33ーえ

遠近法：絵画で距離感を表現する方法。遠上近下の位置や遠小近大の透視図法、また、色調の変化などで表す。パースペクティブ。

臙脂・燕脂：えんじ。エンジムシの雌から採取する赤色染料。生臙脂。紅花から作った染料。べに。紫と赤を混ぜた絵の具。臙脂色の略。

臙脂色：臙脂で染めた濃い紅色。黒みを帯びた赤色。

臙脂墨：臙脂に墨を混ぜた絵の具。赤黒い色をしている。

臙脂虫：カイガラムシ科の昆虫。体長二ミリほどで、赤褐色。雌は翅がなく、体に多量の紅色色素を含み、紅色染料コチニールの原料になる。メキシコに分布し、サボテンに寄生。また、古くはインド・西アジア産の物をさした。えんじちゅう。

臙脂紫：赤みのまざった紫色。

炎色・焰色：炎の色。

炎色反応：アルカリ金属・アルカリ土類金属の塩化物、または、揮発しやすい塩などを炎の中に入れると、炎にその元素特有の色がつく反応。ナトリウムは黄色、バリウムは緑色などを示す。元素の定性分析に用いられる。

怨色：うらみに思っている顔つき。また、そのような気配。(永田泰弘)